



受け継いだ情熱を胸に、恩返しを

かのう れんぎ
狩野 蓮義さん

「小さい頃からの憧れの甲子園で、先輩たちと一試合でも長くプレーしたいという気持ちで戦いました」と甲子園での激闘を振り返ったのは、健大高崎高校野球部の狩野蓮義さん。今夏、甲子園で準優勝した同校で、1年生ながらライトのレギュラーとして試合に出場し、攻守共に大活躍しました。重圧もある中、夢の舞台で思い切りプレーができたのは、メンバーから外れた先輩たちの存在でした。悔しい思いを抱きながらも、蓮義さんを気に掛け、励まし続けてくれました。「先輩の分も頑張りたいという思いでした。試合で活躍し、勝利に貢献することが最高の恩返しです」と話します。その思いの背景には、これまでの野球人生がありました。

小学1年生の時に兄の影響で神田スポーツ少年団に入団し、野球を始めます。当時はそれほど熱中していません。ではなく、友達と遊ぶことが好きな普通の少年でした。経験を重ねるうちに、徐々に野球への情熱が高まります。中学3年生の時の全国大会の決勝戦で、勝利につながるタイムリーヒットを放ち、優勝を果たします。大会MVPにも選ばれました。家族や監督たちの支えがあつてこそ、野球ができて感謝の気持ちを、優勝という形で伝える

自分自身がさらに成長できる環境を求めて、大府を離れ群馬の強豪、健大高崎高校へ進学。自律性を重んじる校風に魅力を感じました。「レギュラーになるための課題を考え、体格では差を埋められない分、特に守備練習を行いました」と話し、兄事ライトの定位置をつかみ取ります。甲子園の準決勝では9回表のピンチの場面でチームを救うダイビングキャッチを見せ、会場を湧かせました。「頭で考えるよりも体が先に動いていて、気付いたらプレーが終わっていました」と振り返ります。しかし迎えた決勝では、惜しくも1点差で敗戦。落ち込む蓮義さんに、先輩たちが「1年生だからまだ甲子園のチャンスはある。俺たちの分まで頑張ってくれよ」と声を掛け、熱い思いを継承しました。

先輩や家族をはじめ、支えてくれる人たちのために、再び甲子園へ。蓮義さんの挑戦はこれからも続きます。



▲甲子園の打席に立つ蓮義さん

cover

6月から稽古を重ねた、大府子ども歌舞伎の晴れ舞台。10回目の記念となる今回は、義太夫三味線も登場。きりりとした音がホールに響き、演じるこどもたちもひととき大きく見えました。幅広い年代のこどもたちが息を合わせて、見事に役を演じ切りました。

